

で、当初の課題である惟治の年齢については、さらに考究しなければならぬ。  
(かわり)

歴史随想

続・望郷史話

南朝の「宮」と佐伯地方

東京都

会員 御手洗 一 而

歴史のかゝわりあい

この稿は全くの書き下ろしです。少々の脱線や、年号の間違いなど、まづお許し願いたい。

ある物語りや小説を設定する場合、必ず主人公が要ることはいまでもない。そして、その主人公を書く時は、主人公の年代やその時代の背景、及び思想まで調べねばならない。

例えは、佐伯市開市の恩人である毛利藩祖高政公の伝記を設定すると、出生場所から佐伯入部までの住所が問題となる。

生まれは名護屋近郊の愛知郡としても、その次に史実として紹介されるのは、松郷の愛領である。では、それだけで事足りるかといえは、その簡単ではない。名護屋から現明石市の松郷、それが隈(日田)入り、次に佐伯では、年代がばらついて物語りにもならない。住所不定の主人公ほど書き難いものはない。だからその中間に、事実であるとする傍証を設定する。例えは、信長は秀吉

に鉄砲の育成を命じ、秀吉は岡友村(関ヶ原合戦場に近い)にしばらく滞留している。そして、年代的に実証出来るから、高政は幼時ここに止まり、のちに伊勢流といわれる砲術の大家になる動機が出来上がる。その後秀吉は長浜城を築き、初めて城と町らしい城割りを作るが、清正や正則にしても、若輩卡チは二、三百石をあてがわれて、城内の長屋住まいをしている。彼らと友人であった高政もその例にならない、それから明石郡松郷の愛領となる。こうしてみると、出生地から松郷までは、少なくとも二か所が定住地を設定出来る。そして、その間の「かかわりあい」が砲術になり、福島正則らとの友情関係となつて生涯を送ることになる。こんな「かかわりあい」が点となり線となつて相互関係をもちが、一つの至近な例からすでに脱線しました。

本題は、私が一族の歴史小説を、藤原時代から明治維新まで書いてやろうと、へんを謀反を起こして調査にとり掛つた。動機やら経過の裏話にあるのです。

一族が米水津湾に流着したのとは永年開ですが、湾内にそれ以前に史実らしい伝承が残るのは、小浦の粟島さんと呼ばれる懐良親王寄浦の事件です。一説には、しげき避難したといわれていますが、私自身にそれだけとはどうしてと思えなかつたのです。この事件からすぐ南北朝時代の「宮」と、佐伯氏との関係を連想しました。このことばかりに触れますが、「宮」ということを意識しますと、それから市福作の「潜龍塔」を想起しました。佐伯地方で高貴の人の墓は、やはり当時の宮方の親王に關係する人ではないかと。その上、近所に建武年代の記考がある石塔も墓があるとすれば、これも南北朝の出来事ではないかと思ふようになった。

十数年未の下調べもここまでではよかつたが、市史の完成が、新しい知識を私の頭に注いで、とうとう私を混乱させてしまいました。「佐伯市史」は全く頼り甲斐があり過ぎて、感謝しながらも悪いヤツです。それは、畑野浦の西河内は、菊池氏の残党が入ったことを、私に教えてくれたからです。

その時の感動は、今でも覚えております。

菊池氏の落武者と聞いて、大友氏と菊池氏（義国）との仲違いと、南北朝宮方の柱であつた菊池氏の二通りを連想しました。

「こりや 潜龍塔時代とあうかも知れんぞ」と、直感しました。

当時宮方の全盛時代には、伊予守護河野通直も親王に参会し、肥後勢と豊後で合流し、臼杵を攻め、一年足らず佐伯に滞留している事実が、「鎮西要畧」に記載されている。

佐伯山城守惟賢は、菊池肥前守と養元爺であり、かつて、一族の中には武家方もあり、豊後一帯は当初から足利方に近かつた。

すると、佐伯荘はどんな意味があつたのだらうか。宮方の橋頭堡を作るに適した土地極ではなかつたらうか。またそれだけ大友氏の監視も厳しいはずである。

こんなことを考えていると、去年のいつだつたか、雑誌さんが宇目の里と懐良親王について「史談」に発表されたことがあつた。

その結果、またまた頭がこんがらがつてきた。そして、小瀬の粟島神社の一件以来、潜龍塔のこし、畑野浦の菊池氏残党のこと、宇目郷のこと、それらが「宮」を中心にして、何か関係がありそうだということが判つた。

その反面、また私のくせが頭をもたげた。「宮は、懐良親王一人でなければならぬ」ということではない。

ということである。

そして、もう一度佐伯氏を洗い直す必要があると思ひ、南北朝にとりかかつた。

さきに「榊牟礼と龍藏寺」と「史談」に書いた時、これは私の祖先と佐伯氏との関係を研究中の副産物であつたが、今度、同じ落武者菊池氏残党の消息が、下瀬村祭りのような意義があつたかという視点である。しかし、歴史の調査は、過去の一時代に限ることは極めて困難である。南北朝時代を知らうと思へば、その前時代に関連し、そして、佐伯氏の祖とする大神氏から更にさかのぼると、結局原給海人族の昔まで戻ることになる。

「古代故郷へのいざない」として、海人族の先人を拾つて見たのもそんなためである。

歴史の関連性とは、全く「それやこれにつきる」と思ひながら、大分脱線しました。

### 謎解きの楽しさと苦しさ

そんなわけ、南北朝時代と勉強した結果、不明や疑問点の方が多く残つたから不思議である。全くそれやこれである。

最初の疑問点は、佐伯氏の系図から始まつた。南北朝動乱期に活躍した、しかも見事にこの難時代を切り切つた、武將であり政治家であつた佐伯山城守惟賢が代に入らず、尊氏の家書にある肝付氏討伐の備前守惟仲が七代、その子惟喬が八代となつてはいるが、惟喬については文献上に全く姿を現わさない。その子が山城守であるが、資料に見る限りあれだけ活躍しながら代に入らず、正平二

十年の院宣で茶を消すことになる。それから約半世紀を経て、安如として九代惟世が頼を出して驚かされる。

佐伯氏の系図は、時代考証に難点が多いが、いつそのこと、

七代<sup>備前守</sup>惟仲―八代<sup>出雲守</sup>惟賢―(武藏)惟季―九代<sup>備前守</sup>惟世とすれば、年代が符合するのりと、勝手なことを考えている。

さらに、山城守については、菊池氏との兼理のためか、宮方に近く、領家職を武家方の戸次氏や備前守に預けられながら、筑後川の合戦などは、必ず武家方大友氏の麾下として行動している。そして、その情勢を見る見通しの良さは卓越したものが有り、破乱の生涯が偲ばれる。

さて、冒頭下毛利高政、いも主人公の住所問題で書いたが、この山城守、つまり佐伯宗家の住所も問題である。しかしこの時代に、堅田入道なる人物が武家方であった資料が残されているし(伊地知文書)、日向の伊東氏と親縁関係にあつた籠門修理を上岡と比定すると、どうも宗家の住所問題は堅田方面ではないような気がして来た。その上、堅田や上岡の一族が武家方に近かつたことは、河波城の上杉氏の監視付きを見てわかる通り、佐伯氏の縁縁時代を匂わせている。

このような時代に、懐良親王が小浦に寄っている、私にこの小浦の寄浦は、海上遺難より、肥後入り口の偵察と見ていたが、阿蘇文書に見る佐伯氏との連絡は、かりに首尾よく連絡出来たとしても、佐伯氏が武家方の勢力圏にあることを知り、あきらめざるを得なかつたと思ふ。この懐良親王の行跡については、現在残されている阿蘇文書が大へん重要性をもっているが、その不備な点による論争点は、すべて年代の問題である。

景浦博士の「伊予史精義」と読むと、忽那島滞在期間が三年、随行員十二名は確かで、薩摩に着いた年から逆算して、忽那島渡御の年を問題にしている。延元二年と四年説である。この二説も、もとは阿蘇文書の日付けから起こっているが、博士は伊予の資料を駆使して、忽那島の内訌の治まるのを延元四年とし、内訌中に親王の忽那島渡御はあり得ないとしている。

そして、この二説によつて、小浦の行跡や、薩摩坊ノ津に着くまでが割約されてくる。つまり、前説は一年の空白を生じ、後説は小浦に立ち寄つたことを事実とすれば、そのまゝ薩摩に向かうことになる。

さて、潜龍塔の問題はどうであるか。さきになし触れたが、懐良親王が九州を平定するとき、菊池勢の高田三郎と伊予勢の河野通直が豊後南部を鎮圧して、佐伯に滞留している。このことは佐伯氏の地理的意義を考えさせられるとともに、一応山城守と菊池氏との親縁関係を認めてよいと思う。そうすると、佐伯氏を完全に掌握するため、誰か宮を奉じたことは考えられな

いだろうか。私は、あり得ると思つている。高田氏と河野氏との合流は、たしか「竹中陣攻め」とあつたと思う。この竹中陣がどこか比定出来ないが、肥後から入つて、のちに臼杵攻めを考えると、竹田あたりかもしれないと思われ、その後宮を奉じた宮方は、佐伯荘のどこかに駐死したとも考えられる。さうすれば、佐伯荘のあちこちには、宮に關する南北朝時代の伝承が残つてもよいことになる。いつたい、私見による奉じた宮とは誰であろうか。空

理・空論であるかもしれないが、四名の親王が浮かんた。征西將軍懐良親王、良成親王、元弘の乱で土佐に配流され、のち九州に渡ったといわれる尊良親王、大宰帥の世良親王、この御四方である。戒念有から淡淳の私史、この四親王の行跡を知らないが、佐伯莊に奉じた「宮」は、この四親王の御子であつてもよい。

そして、宮方の衰退まで、高崎城では百回に及ぶ攻略がくり返されたとわかれるが、佐伯氏の勤はた気配はなない。筑後川決戦以後の佐伯氏の行動は、全く謎にまつまれているが、この宮の橋頭堡は、確かを勢力を感じさせるものがあると思ふに考えている。

しかし、時勢は日抗しきれず、佐伯地方は一波乱あつたと見たい。そして、この宮の最期が灌龍塔の高貴の人であり、南北合一なつた時、すぐにも祀られたのではなからうか。

だいたい、諸系圖書を見ても、戦乱期の都合の悪い所はまつ殺されている。佐伯氏の不備な点も、案外そんなところではないかと推察している。

ところで、市橋所の子輪経墓は、宮方の勢力として、菊池氏も佐伯氏の武将も葬られていたかもしれない。そして、この時期の菊池一族の敗者と、畑野翁の菊池武覚とは結びつかないだらうか。これも私見の推測だが、これ以外に戦況の畑野浦に入る勳勳や時代は、考えられなれている。そうになると、海からであるか。また市橋所付近から畑野浦への経路、山越えはどんなものであらうか。

こんなことは、地圖を見てわかるものではない。土他の人との茶飲話に、古老からうけるへんてつもない話

りの中に、かすかなヒントを得られることがある。

ここまで一氣に書いて、脱線しながらも懸案の教点か、やはり「宮」を基点にして、何かつづがついていようと思えてならない。不明な点があれば、きりした事だけでも収穫があると、私なりに満足している。

そして、研究書のない、九州入りした南朝親王系統の研究、こんなことで私の頭は一杯である。(おわり)

便りの中から

その一

スペイン・ポルトガルに 東 京 生 菜 庄 氏 より 親善使節を

同封の字具は、昨年十月スペインポルトガルを訪れた際、四百年前大友宗麟公のローマ法王宛の親書を託された、伊東マシヨ一行が訪ずれば、大変な歓迎を受けた、当時のスペインの首都であった、トレド市の玄関口のものです。

おまうど画家ゴヤなどがここに住んでいて、一行は会つてゐるはずです。一九八二年が、長済を出発してちょうど四百年記念となり、今私が大分県当局に話して、大分県知事を団長とする、親善ミッションを出してはどうかかと、提案してゐるところです。

相手のスペイン・ポルトガルの関係者は、是非やつて来てほしいと云つておられます。

昨年私がヨーロッパ出発前に知りあつた方ですが、横浜に在住の七十二歳の大友義彦(とよ ぎへん)という、大友宗麟直系の方がおられます。つい先日津又見宗麟公の新しい廟の除幕式で参列され、県知事や上岡保氏とは、以前から知友の関係にありす。そこで佐伯史談会のことと云え、会誌を一部差し上げました。なにしろ直系ですから、大友氏一族に關するご記憶は、たいしたものです。(下略)

(注) 少年使節の渡航は、宗麟は関知してゐないが定説しかし提議賛成用